

被爆71年 原水爆禁止広島大会 第2回安野フィールドワーク報告

河村 京子

原水禁広島大会2日目の8月5日、「安野発電所への中国人強制連行・中国人被爆の歴史を歩く」バスツアーが実施されました。このツアーは強制連行されてきた中国人たちの過酷な労働と生活の跡や、和解事業の一環として建てられた「安野 中国人受難之碑」を巡ります。私は昨年に続いてスタッフの末席に加えていただき、ツアーのお手伝いをしながら学習を深めるという充実した1日を過ごすことができました。

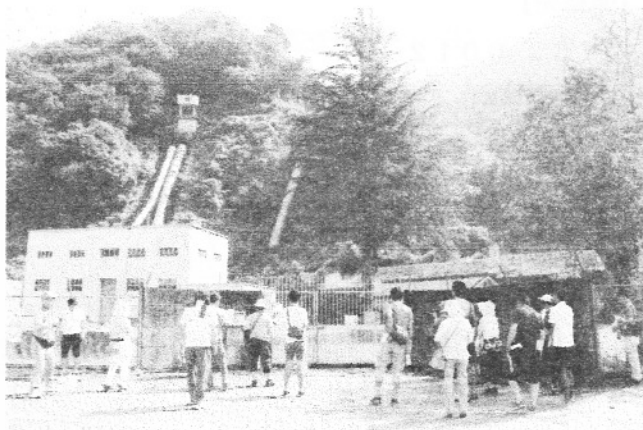
平和公園を出発

午前8時。9道府県から参加された19人と私たちスタッフ4人を乗せたバスは、安芸太田町に向けて広島平和公園を出発しました。安野に着くまでの1時間、車内ではスタッフの挨拶と参加者の自己紹介の後、事前学習として、DVD「50年目の叫び——広島・安野への中国人強制連行の真相」（1997年制作）を鑑賞しました。

安野発電所と「安野 中国人受難之碑」

安野に着くと、まず地元の善福寺でトイレ休憩を取った後、最初の見学地安野発電所に行きました。

安野発電所は西松組（現在の西松建設）が1944年5月に着工し、46年末に完成しました。土居の取水口から山中の導水トンネルに水を引き込んで8キロ下流の



安野発電所前で説明を聞く参加者

坪野貯水槽まで運び、65メートルの落差を利用して発電する水力発電所です。発電機が2基あり、山の上から発電所の建物の横まで2本の太い鉄管が下りてきていますが、向かって右側の2号機が中国人と朝鮮人の労働で造られたそうです。

中国人360人が強制連行により安野に連れてこられ、4カ所の収容所に分けて入れられたのは1944年の8月6日のことでした。それから終戦によって解放され、帰還船に乗るために45年11月24日に安野の地を離れるまでの15カ月間、彼らは過酷な労働と生活を強いられたのでした。事故や病気、被爆によって29人が亡くなりました。

安野発電所を望む高台に「安野 中国人受難之碑」があります。この碑は安野発電所の建設を請け負い、中



「安野 中国人受難之碑」前で記念撮影

国人を強制的に働かせた西松建設と、中国人受難者や遺族との和解事業の一環として建立されました。この碑の特徴は、加害者と被害者の連名で碑文が刻まれていること、異国の地で亡くなった人だけを追悼するためのものでなく、安野発電所建設工事で過酷な労役に従事させられた人全員の名前が刻まれていることの2点です。

発電所の門前での説明（スタッフより）や、碑から60メートルほど登った山の上にある坪野貯水槽での説明（中電職員より）を聞いた後は、名前も顔も知らない中国の方の汗と泥にまみれ苦痛にゆがむ顔が碑の

陰から立ち上がり、彼らを怒鳴りつける現場監督の声が聞こえてくるような錯覚を覚えました。

善福寺にて

坪野地区での学習を終えて、11時に善福寺に帰って来ました。善福寺の3代前の住職が坪野で亡くなって火葬された中国人の遺骨5柱を預かり弔っておられました。本堂で被害者やその遺族の証言と和解までの道のりなどのパネルを見学し、住職の挨拶の後、善福寺が遺骨を預かった経緯や遺骨の返還についての説明と、所用で来られなくなった証言者の裁判での陳述書の紹介がスタッフからありました。また香草出身の栗栖薫さんは、当時の中国人の労働や生活を見ていた経験からトロッコの模型を使って、トンネルからハッパで碎かれた石を運び出す作業の様子を詳しく説明してくださいました。ここまでで午前中の学習を終わり、昼食休憩に入りました。

津波収容所跡

午後1時に善福寺を出発し、10分ほど北に走った所にある津波収容所跡をバスの中から見学することから午後の学習が始まりました。今は水田になり、稲が青々と育っていましたが、当時は3棟がコの字形に続いた宿舎に100人が寝起きし導水トンネルを掘ったそうです。津波収容所のすぐそばに住んでおられた住民の方の証言がスタッフから紹介されました。宿舎のそばにあるかまどで煮炊きされている食事の貧しさ、厳しい冬の寒さを防ぐために体にセメント袋を巻き付けて荒縄で縛った姿。想像すると胸が痛みました。

栗栖薫さんのお話

午後2番目に訪れたのは香草収容所跡です。津波収容所跡からバスで10分の所にあります。ここにも100人の中国人が収容され、津波と同様トンネル掘りに従事させられていました。神社の隣に3棟が続いた宿舎があり、ここからトンネル工事の現場に通っていたそうです。私たちは神社の階段に腰を下ろし、15～16歳だった当時、香草収容所の監視員だった父に連れられてよく収容所を訪れていた現在87歳の栗栖薫さん



香草収容所跡で栗栖さんの話を聞く参加者

から、中国人の生活ぶりや仕事の様子、終戦後の混乱などについて話を聞きました。8月15日は日本にとっては敗戦の日ですが、強制労働をさせられていた中国人にとっては解放の日です。この日以降地元の商店や農家への中国人による略奪が多発したことや、近辺住民が戸をきっちり閉めて息をひそめて暮らしたり、危険を感じて遠くの親戚に避難したりしたと言う話を聞き、人間同士が虐げ、虐げられる戦争の怖さと悲しさを感じずにはいられませんでした。

土居収容所跡と取水口

香草収容所跡から更に北へ10分進み、ツアーの最終訪問地である土居収容所跡と土居取水口を訪れました。収容所だった場所は空き地になっていて夏草が生い茂っていましたが、この一角に60人が収容されていました。仕事内容は取水口を作ることと、坪野に向けての導水トンネルを掘ることでした。中電職員の方から取水口の機能と構造、当時の工事の跡などの説明



土居取水口で中国電力職員の説明を聞く参加者

を受けました。また、中国に行つて土居取水口建設現場で働いていた被害者の体験を聴き取ったスタッフが、当時の工事の様子や収容所での生活について紹介しました。1日中水に浸かっての作業で、少しでも遅れると容赦なく殴られたこと、仕事を終え収容所に帰って

きて土間から寝床に上がろうにも足を上げることができず、自分で足を持ち上げなくてはならないほどだったこと、あまりの辛さから逃亡を試みたが失敗に終わったことなど、聞いているのが苦しくなるような話でした。

参加者の感想

全ての目的地の見学を終え、帰路についたのは午後3時30分でした。平和公園までの1時間、マイクを回して参加者とスタッフの全員が感想を出し合いました。一部を紹介します。

- ・初めてこのツアーに参加し、中国人強制連行についても初めて知った。終戦から中国帰還までの100日間の中国人の方の生活に驚いた。戦争によって互いに憎しみ合う、こんなことがない日が続くよう願っている。
- ・明日福島へ帰る。福島第1原発に行って状況を見て、原爆と比較して考えたい。
- ・フィールドワーク初体験でとても新鮮だったし、衝撃も大きかった。学んだことを職場や家庭に広めていきたい。
- ・強制連行は国家による犯罪で岸信介によるものだ。孫の手によって再び同じようなことが起こらないか危険を感じている。
- ・このツアーを組んでくださったみなさんの熱い思いや取り組みに胸を打たれた。周りに伝えていきたい。

スタッフとして参加して

参加された方の感想の中にもありましたが、今回西松建設との和解成立までの道のりをDVDや資料で詳しく知り、この運動をずっと牽引してこられた川原さんと岡原さんの情熱と行動力に強く感動しました。

秋田県花岡に強制連行された中国人問題に関わる中で、安野にも同じように中国人強制連行の歴史があることを川原さんが知ったのが1990年夏、交渉や裁判闘争を経て和解が成立したのが2009年秋ですから、実に19年の歳月が流れています。その間、中国の河北大学の協力を得ながら何度も訪中して生存者や遺族の方から聞き取り調査をしたり、逆に生存者や遺族を日本に招いて、各地で証言集会を開いたりされました。

もちろん、現地安野にも度々足を運ばれました。初めは口を固く閉ざしておられた方も、川原さんの「中国人被害者の苦労や無念をこのまま闇に葬ってはいけない」という強い思いが伝わったのでしょうか、ポツリポツリと当時の様子を語ってくださるようになったそうです。

被害の実態が次第に明らかになってきましたが西松建設との交渉はなかなか進展せず、1998年には裁判闘争に発展するとすぐに「西松建設裁判を支援する会」を結成され、支援を呼びかけていかれました。2007年に最高裁で逆転敗訴しましたが、その時判決に付け加えられた「西松建設を含む関係者において、被害者らの被害の救済に向けた努力をすることが期待される」という付言が2009年の和解につながったのだそうです。西松建設が、安野発電所への中国人強制連行・強制労働が閣議決定による歴史的事実であることを認めて謝罪を表明し、和解金として被害者や遺族へ2億5000万円を支払うことになりました。「安野 中国人受難の碑」は和解事業の一環として和解1周年の2010年10月23日に建てられました。

川原さんは“安野”を知ってから今日までの26年間ずっとこの問題に取り組んでこられ、埋もれていた事実を掘り起こし、踏みこじられた中国人被害者の人権に光を当てました。このことに震えるほどの感動を覚えます。

私は3年前に小学校教員を退職しました。安野の中国人強制連行のことはかなり早い時期に知り、何度か西松裁判支援のカンパをしました。しかし、それ以上のことをしませんでした。もっと早くこの問題を正視して学ぶべきだった。そうして、もっともっと戦争の悲惨さ、平和の大切さを子どもたちに語ればよかったと悔やんでいます。今回ツアーに参加された方の多くは強制連行についてご存知ありませんでした。アンケートに「この事実を周りに伝え、広げていかなくては」と書かれています。私も地元広島に住む者として1人でも多くの人にこの歴史の悲しい事実を知ってもらい、二度とこのような愚かなことが起こらないよう、後世の人が今を「戦前」と呼ぶことのないよう微力を尽くしていきたいと思います。